

4 7 多数派意見こそ正解であるという先入観

【聖マタイの召命】解釈混迷の理由

真鍋友範

2023

1 人は先入観を排除できない。

残念ながら、人は先入観なし対象を見ることが困難だ。対象が絵画である場合も同様なのだ。

ここで、カラヴァッジョの描いた《聖マタイの召命》を挙げて、その問題点を明らかにしよう。



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ
サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂

実は、現地でこの絵画を見ようとする、少々問題があることに気づく。何故なら、普通は、関係者以外、正面からは見られないのだ。この絵画はコンタレッリ家の礼拝堂という名の、コの字形の入り組んだ空間の左側壁面に掲示されている。しかも入り口には、侵入防止の扉があり、鑑賞者が自由に立ち入ることが不可能なのだ。

これにより、どのような先入観を抱く結果になるのか。

まず、画面の左側は、近いので、大きく、かつ鮮明だ。対して右側は、小さく、かつ不鮮明だ。

このことにより、画面左側のより人物には視線が集中する。

つまり【重要なものがより近い場所に描かれている、との先入観】に陥りやすい。

これは一つの問題を生じさせている。

右側の奥になる位置に描かれたイエスや、弟子パウロの身体動作への観察が疎かにされるのだ。

具体的には、イエスの右手、イエスの右足、イエスの左手の細部、パウロの両足の位置関係などが、よく見えず、作品理解の手段・対象から無意識に除外されてしまうのだ。

次に、挙げられるのは、【呼ばれる弟子なら、師匠より若いだろうという先入観】だ。つまり、30歳代に設定したイエスなら、その弟子は20才代が適当だろうと考える先入観だ。しかし、《最後の晚餐》に描かれているイエスの弟子たちの年齢を推測しても、多くがイエスより年配であるように描かれている。つまり、1600年において、現代人の考えるような常識を当てはめて、イエスより若年齢の人物を弟子と断定してはいけないのだ。

三番目は、【主役は目立つところに描かれるという先入観】だ。これは納得する方も多いかもしれない。宝塚のスターや、ステージの芸能人の姿をイメージするかもしれない。しかし、カラヴァッジョという画家は、そのあたりの常識を持ち合わせない変な画家だ。【脇役が主役より目立つ配置・構図を平気で採用する画家】なのだ。事実、イエスは脇役のパウロの向こう側に隠されそうだし、呼び出されるマタイも、若い収税人の向こう側に体の一部が隠れている。このような構図を採用するのは画家カラヴァッジョの際立った特徴なのだ。

四番目は、【人を手で呼ぶときは指差すという先入観】だ。これも思い当たる人は多いだろう。しかし、手首を曲げ、指に力を込めず、その結果指先が曲がったままで人を指差す人はいないのだ。例え《聖マタイの召命》のように。イエスの指先が曲がっていても、【力なく指差した】などと解説して平気な美術史家も存在する。

五番目は、【絵画は写真と同じで、静止画だ】という先入観。これもよくある。つまり、スナップ写真のように時間を止めた一瞬の描写であると誤解してい

る人は多い。この概念を最初に打ち破った絵画は、《最後の晚餐》だ。《最後の晚餐》は、イエスが裏切り者の存在を弟子たちに語った瞬間から、弟子たちが身体動作で各々の反応を示すまでの、数秒間が連続表現されている。一方《聖マタイの召命》は、ヒゲ男のイエスへの質問に始まり、イエスの質問受容の動作、イエスの視点移動の動作、イエスの右手を回す動作に続く連続表現だ。カラヴァッジョは、ミラノでダ・ヴィンチの絵画をしっかりと研究し、自己の絵画に応用表現している。

六番目は、【絵画なのだから、写真に比べたら、その正確度は低い描写だろう、という先入観】だ。

ところが、驚くほどカラヴァッジョの【精度への情熱は高いものだった】。その証拠は、パウロの描写だ。パウロはイエスの従者なのだから、直接主題とする召命とは関係ないように、見る人は思い込んでしまう。ところが、パウロの両足の中心軸は、マタイの足元に正確に向いているし、パウロの体幹は、まっすぐマタイに正対するように配置されていて、隙がない表現なのだ。

七番目は、【人が人を呼び出す時は、指差すだろう】と言う先入観だ。指差す以外にも、相手を特定する方法として、質問する人物との位置関係を示唆する方法もあることを、悲しいかな、想像できないのだ。カラヴァッジョは本当に聡明だ。質問した髭の男に対して、ズバリ「あなたの向こう側のメガネの人」だと特定しているのだ。

2 結論

結論として、我々は先入観に影響されて、真実を見極める目が眩まされるケースが多いということだ。この【先入観を克服した後、初めてカラヴァッジョの考えた絵画世界の秘密を解き明かすことができるのだ。】

ところが、問題は、この克服がとても高いハードルとなるのだ。この先入観を克服できない人は、実は多い。多いということは、誤った認識の説をそのまま正しいと錯覚してしまうのだ。先入観の結果は、錯覚に基づいた誤謬解釈なのだ。

世の中には、多数決という考え方があるが、この美術世界では、誤った判断でも、多数の判断とされる場合、永く是正されないのだろう。

残念ながら、現在でも本作品の持ち主であるローマ・カトリック教会は、この事実に気づいていない。